

校本『をられぬみづ』稿 (二)

片 山 享

夏 歌

更¹ 衣

慈円大僧正²

九一 ちりはてゝ花のかけなき木のもとに立ことやすき夏

ころもかな (一七七)

本歌けふのみと春をおもはぬ時たにもたつことや
 すき花のかけかは、本歌³の花のかけは弥生のつこ⁴
 もりの日のことなれば、花のかけなきは卯月朔日
 のことゝきこえたり、このもとにのもしはなれ
 はの意にて、此⁶ことさきにもいへり、衣を立は衣
 をかふることにて、此⁷ことも子日の歌の下にいへ
 り、上句はたつこと⁸安きといはん有心の序にて、
 下句は月日のうつりやすきことを歎く意也¹⁰

〔学〕三ノ句は木のもとなればの意なり、此にもしのことさきにもいへり、本歌けふのみとはるをおもはぬ時たにも立ことやすき花のかけかは

1 更衣―更衣をよみ侍りける(学)

2 慈円大僧正―慈円(乙)

3 本歌の―此本歌の(乙)

4 つこもりの日の―つこもりの(野)

5 このもとゝ意にて―木の本には木のもとなればの意也(野) このもとには木のもとなれの意にて(乙)

6 此ことさきにもいへり―ナシ(野) 此にもしのことさきにもいへり(乙)

7 此ことも子日の―此のこと春の子日の(野)

8 たつこと安きといはん―ナシ(野・乙)

9 下句は月日のゝ意也―下句に月日のはやくうつりかはりたることを歎くことあり(野)

10 歎く―なけきたる(乙)

夏のはしめの歌

俊成卿女

九二
をりふしもうつれはかへつ世中の人のこゝろの花そ
めの袖²⁴ (一七九)

本歌いろみえでうつろふものは世中の人の心の花
にそありける、心の花はうつろひやすき心を花に²
たとへたるなり、時節³もうつれは世の中の人の心⁴
もかはりて花そめの袖も夏衣にかへたりといふ意
也

齋院に侍りける時神たちにて 式子内親王

九三
わすれめやあふひを草に引むすふかりねの野への露
の明ほの (一八二)

初句のやは意のうらへかへるやにて、わすれめや
わすれはせじといふ意也、あふひを草に引むすふ
は、あふひを草の枕に引結ふ也、⁵のまくらにのつ
ゝめとなるにてしるへし、三の句引むすひとあ
る本はうつしひかめたる也、ふかひかよく似たり、
⁶
⁷
⁸二三四五一とつゝく意にて、露のあけほの、此¹⁰

〔学・ナシ〕

1 世中―世の中(野・乙)

2 花にたとへたるなり―いふ(乙) いふ、結句にも、
しをそえて(野)

3 時節もうつれは―折ふしもうつれは(野) 折ふしも
うつれかはれは(乙)

4 心もかはりて―意也―心の花染の袖もかへつと詞を
次第して意得へし(野) 心の花そめのそでもかへつと
詞をそへて次第して意得へし(乙)

〔学〕ひきむすふ草葉も霜のふるさとはくるゝ日こと
に遠きかりつゝ、此うたのひきむすふ草はといふも同
し意にて、草をむすふは野へにやとること也、あふひ
を草に引むすひはあふひを草にかへて引むすひなり、
さて此歌ひきむすひにてはとゝのはすゝもと引むすふ
かりねとありしをうつしひかめたるなるへし、ふかと
ひかと文字よく似たり

1 初句のわすれめや―初句はわすれめやは(野)

2 うらへ―ナン(乙) 3 草の枕に―枕の草に(野)

4 引結ふ也―引結ふの意也(野)

5 のまくらに―しるへし―まくらといふことをいはて
しかきかせたる格也(野)

あはれさは年へてもわすれめやと詞をそへてみる
へし

あふひをよめる

小侍従

九四
いかなれはその神山のあふひ草としはふれとも二葉
なるらん(一八三)

そのかみと神山へいひかけて、そのかみはその時
といふことなり、此加茂の神をむかしいはひそめ
しその時よりあふひは年をふれとも猶二葉なるら
んといふ意也

最勝四天王院障子に浅香沼かきたる所

雅¹経卿

九五
野へはいまた浅かの沼にかかる草のかつみるまゝにし
けるころかな(一八四)

のへの草はいまたあさしと浅香²へいひかけて、又
かる草のかつみへかつみるといひかけたり、かつ
みは水草にて、霜に枯たる野の草よりははやくお
ひたつ物なれは、⁶ かつみるまゝにしけるとは

⁶ 本は「本はわろし(野)」
似たり(野・乙)

⁸ 二三四五一「みるへし」ナシ(野)
⁹ 意「心(乙)」
¹⁰ 此「ナシ(乙)」

〔学・ナシ〕

¹ 此「ナシ(野・乙)」
² あふひは「意也」此山のかは
らぬことをあふひによせてよめる歌也(野)
² あふひ
は「あふひはふた葉にて(乙)」
³ 猶二葉なるらんとい
ふ意也「此山とくもにかはらぬはいかなることならん
といふ意也(乙)」

〔学〕一二ノ句野への草はまたあさしといひかけたり、
すへて水草はみつの中にありて霜にも雪はもさのみい
たくは枯すして野への草よりはしけるも、またはやき
ものなれはかくはよめるなり、家つとの難はあたらす
¹ 雅経卿「藤原雅経(学)」
² 浅香へ「浅香の沼へ(乙)」
³ いひかけて「かつみる」いひかけたる草のかつみと
かつみる(野・乙)
⁴ と「に(野)」
⁵ 野の「野への
(野・乙)」
⁶ 物なれは「もの故に(野)」
⁷ いへり「い
へる也(野)」
⁸ 野本は「いひかけたり」の次にある。

い⁷へり、かつは⁸そのまゝといふ意也

題しらす

俊成卿

九六 むかし思ふ草のいほりのよるの雨に涙なそへそ山は
とゝきす (二〇一)

楽天か詩の廬山雨夜草庵中といへる句をとれり、
むかし思ふは、楽天かむかしをおもふ也、楽天か
むかしを思ふ草の庵の夜の雨のあはれるうへに、
又涙をそへて鳴ことなかれと時鳥におほする意也

九七 雨そゝく花たちはなに風すきて山はとゝきす雲に鳴
なり (二〇二)

風すきてといへるにて、立花のかをることは聞え²
たり、かせ過てそゝく雨に立花のかをるは、いと⁴
涼しくこゝろよきを、又時鳥の雲に鳴てあはれを⁶
そへたりと也⁷

海辺時鳥¹

公通

九八 二声ときかすはいてしほとゝきすいく夜あかしのと
まり也とも (二〇六)

9 そのまゝーじきに(乙)

〔学・ナシ〕

1 いへる句をとれりーいふ句をとられたり(野)

2 おもふ也ーおもふの意也(野)

3 楽天かーおほする意也ー三の句の下にまたといふ詞
をそへてみるへし(野) よるの雨にまた涙なそへそと
詞をそへてみるへし、夜の雨のあはれるうへにまた
涙をそふることなかれの意也(乙)

〔学・ナシ〕

1 かをるーかをりくる(野) 2 聞えたりーしられたり

(野) 3 かせ過てゝかをるはー雨に花たちはなの涼し
くかをるたに(野) かせ過てふる雨に立花のかをるだ
に(乙) 4 いと涼しくこゝろよきをー涼しく心よきを
(乙) 心よきを(野) 5 又ーナシ(乙) 6 あはれをー
いよ／＼あはれを(野) いとゝあはれを(乙) 7 と也
ーといふ意也(野)

〔学・ナシ〕

1 海辺時鳥ー海辺時鳥といふことを(野)

いてしは舟をいたさじ也、三四五一二とつゝけて
 みるへし、下句はいく夜あかして此うらにとまる
 3 3 3
 ともの意也

百首歌奉りける時

範 光

九九
 ほとゝきす猶ひと声は思ひ出よ老その杜の夜はの昔
 を(二〇七)

本歌東路のおもひてにせん時鳥おいその杜の夜は
 のひとこゑ、二三の句に猶思ひ出てひと声はなけ
 といふ意なり、一四五二三とつゝけてみるへし

千五百番歌合に

1 撰政太政大臣

一〇〇
 有明のつれなくみえし月はいてぬ山ほとゝきす待夜
 なからに(二〇九)

2 2 2
 あり明の月はおそくいづるものなれば、つれなく
 みえしとはいへる也、月は出ぬといへるにて、時
 鳥は待夜なからに」26 てまだなかぬことは聞えたり、
 四五一二三とつゝけてみるへし

時鳥を

八条院高倉

2 三四五一二とつゝけてみるへし—この文は次の文の
 終りにくる(野・乙)

3 みるへし—意得へし(乙)

〔学・ナシ〕

1 意なり—こゝろ也(野)

2 一四五二三とつゝけてみるへし—ナシ(乙)

〔学・ナシ〕

1 撰政太政大臣—撰政(乙)

2 2 2
 2 あり明のゝみるへし(全文)—二三の句はすくにつれ
 なく見えし月はいてぬるのこゝろにて、下句のまつを
 こゝにもひゝかしてみるへし、月は出ぬといへるに
 て、まだ時鳥のなかぬことは聞えたり(野)
 3 3 3
 3 いへるにて—いふにて(乙)

〔学・ナシ〕

一〇一
ひと声はおもひそあへぬほとゝきすたそかれ時の雲
のまよひに (二〇八)

一二の句、一こゑはほのかにて、定かに鳴たりと
も思はれすといふ意にて、おもひそあへぬは思ひ
そえぬ也、あへ¹のつゝめえ²となるにてしるへし、
たそかれといへるにかけあへり、雲のまよひは雲
のかなたこなたへ行かふをいひて、下句はたそか
れ時の雲のまよふ空にといふ意也⁵

¹十首歌よみ侍りけるに 俊成卿

一〇二
我こゝろいかにせよとてほとゝきす雲間の月のかけ
に鳴らん (二一〇)

時鳥は五月なく鳥なれば、此雲間は五月雨の雲間
と聞えたり²、はれんとするさみたれの雲間よりめ
つらし³くいてたる月かけにまち／＼し時鳥の鳴
て、いとあはれにたへられぬより、我心いかにせ
よとて鳴らんとはいへる也

入道前太政大臣

¹ 定かに―ナシ(野) こゝらに(乙)

² 思はれすゝ思ひそへぬ也―おもひそえぬといふ意也
(野) ³ かけあへり―よくかけあへり(野・乙)

⁴ へ行かふをいひて―に行かふをいふ(野) に行をい
ひて(乙) ⁵ 意也―こゝろ也、四五二三とつゝけて
みるへし(野・乙)

〔学〕 我心いかにせよとてとはものゝあはれにたえら
れぬよりいへること也、下句は雨のはれんとする雲間
よりめつらしく月のいてたるかけにまち／＼し時鳥の
なくをいふ

¹ 十首歌よみ侍りけるに―後徳大寺右大臣家に十首歌
よみ侍りけるに(学) ² 聞えたり―聞ゆ(野)

³ 鳴て―わか心をいかにせよとて鳴らんといふ意也
(野) ⁴ いとあはれに―あはれに(乙) いとあはれに
て(野)

〔野本〕「いとあはれゝいへる也」の文は注文最初にあ
る。

〔学・ナシ〕

一〇三 ほとゝきす鳴て入さの山のはは月ゆゑよりもうらめ
しきかな (二一一)

鳴て入さの山よりは又いつ出て時鳥のなかも
しらぬ故に、月の入りもうらめしとはいへる
也

親 宗

一〇四 有明の月はまたぬにいてぬれと猶山ふかきほとゝき
すかな (二一二)

上句は夜のふけよとはまたぬによの更て、有明の
月はいてぬれとゝいふ意¹にて、下句は猶山ふかく
こもりゐて時鳥はいてこぬことかなといふ意也²

杜間郭公

保¹ 季」 27

一〇五 すきにけりしのたの杜のほとゝきすたえぬ雪を袖に
のこして (二一三)

初句はひと声鳴てすきにけりの意也、二三四五一
とつゝけてみるへし、たえぬ雪はしの田の杜のよ
せにて、いつまでもしのはれておつる涙をいふ

〔野本〕 ほとゝきすは鳴て入さの山より又いつ出てこ
んともしらねは、月の入りもうらめしきかなの意
也

〔乙本〕 鳴て入さの山よりほとゝきすは又いついてゝ
なかもしらねは、月のいるよりもうらめしと也

〔学・ナシ〕

1 意にて―意也(野)

2 こもりゐてゝ意也―こもりていでこぬほとゝきすか
なのこゝろ也(野・乙)

〔学〕 たへぬは忍ふにたへぬ也、しのたのもりとある
にてしか聞ゆ、初句はひとこゑなきて過にけりの意に
て雪は涙なり

1 保季―保季朝臣(学)

2 みるへし―意得へし(野)

3 しの田の―ナシ(乙) しの田の杜のゝ涙をいふ―い
つまでもしたはるゝなみたのこはるゝをいふ、雪は杜
のよせ也(野)

題しらす

家隆卿

一〇六 いかにせんこぬ夜あまたの時鳥またしと思へはむら

雨の空(二一四)

本歌たのめつゝこぬ夜あまたになりぬれはまたじ
と思ふそ待にまされる、二三四五一とつゝけてみ
るへし、下句はまたじと思へは、又鳴へき村雨の
空になりたりといふ意也⁴

百首歌奉りける時

式子内親王

一〇七 声はして雲路にむせふほとゝきす涙やそゝくよひの

村雨(二一五)

本歌こゑはして涙はみえぬ時鳥我ころもてのひつ
を」からなん、一二の句こゑはしてすかたはみえ³
す、雲路にむせふと詞をそへてみるへし、雲路に
むせふはくも路を行時鳥の雲にむせて鳴をいふ、
四の句はなみたやそゝくらん也、くらんのつゝめ⁵
くとなるにてしるへし、下句は涙やよひの村雨に
なりてそゝぐらんの意也⁷

〔学・ナシ〕

1 本歌―ナシ(野)

2 まされる―まされるといへる歌の詞をとられたり

(野)

3 鳴へき―鳴へくおもはるゝ(野)

4 なりたり―なれり(野・乙)

〔学・ナシ〕

1 本歌―ナシ(野) 2 一二の句ゝみるへし―此句の

詞をとり玉へり、こゑはしてといへるにてすがたのみ

えぬことはしられたり(野)

2 一二の句―上句(乙) 3 みえす―みえねと(乙)

4 むせふと―むせふほとゝきすと(乙)

5 四の句は―ナシ(野) 6 下句はゝの意也―ナシ(野)

7 の意也―といふこゝろ也(乙)

千五百番歌合に

公経卿

一〇八

ほとゝきす猶うとまれぬこゝろかななか鳴さとのよ
その夕くれ(二一六)

本歌ほとゝきすなか鳴さとのあまたあれば猶うと
まれぬ思ふものから、本歌のうとまれぬはうとま
れぬるの意にて、此歌のうとまれぬはうとまれす
の意也、³本歌は時鳥を宿⁴にて聞たる意、是は時鳥
をよその里⁵にてきゝたる意也、ほとゝきすなか鳴
さとのよその夕くれの空、猶うと²⁸まれぬ心
かなと詞をそへて句を次第してみるへし

題しらす

¹西行法師

一〇九

きかすともこゝをせにせん時鳥山田かはらの杉のむ
ら立(二一七)

こゝをせにせんはこゝをきゝ²所にせんといふ意也、
³四五三一二とつゝけてみるへし、杉⁴の村立には時
鳥のよく鳴⁵もの也

一一〇

ほとゝきすふかき嶺より出にけり外山のすそこゑ

〔学・ナシ〕

¹ 意にて―なるを(野)こゝろにて(乙)

² はうとまれすの意也―のぬもしは不の意のぬなり
(野)

³ 本歌は―意也―ほとゝきす―次第してみるべ
しの後にくる(野・乙)

⁴ 宿にて聞たる意―宿にまち
てよめるこゝろなれば(野)

⁵ 里にてきゝたる意也―里に行て時鳥を聞たるこゝろ
也(野)

⁶ ほとゝきすゝみるへし―上句を猶うとまれぬ時鳥の
こゝろ哉とのもしをそへて詞を置かへ下句はなかな

くよそのさとの夕くれと次第して意得へし(野) この歌
は猶うとまれぬ時鳥の心かななか鳴よその里の夕くれ

の空と詞をそへて次第してみるへし(乙)

〔学・ナシ〕

¹ 西行法師―西行(野・乙)

² きゝ所にせんといふ意也―まち所にせん意也(野
・乙)

³ 四五三一二ゝ鳴もの也―ナシ(野)

⁴ 杉の村立には―山田の原の杉の村立には(乙)

⁵ よく鳴もの也―いかにもなくへくおもはるれはこゝ

をせにせんといへる也

〔学・ナシ〕

の落くる (二一八)

深き嶺と外山のすそとかけ合せてよめり、¹四の句の下に遠くといふ詞をそへてみるへし、高き空より外山のすそに声の落くるを聞て、³深きみねより時鳥の出たることをしれる也、⁴一四五二とつゝけてみるへし、三の句のけりはおしはかりたる意にて、けらしのつゝまり也

山家暁時鳥

後徳大寺左大臣

一一一
小笹ふくしつか丸屋のかりの戸を明かたに鳴ほとゝきすかな (二一九)

明かたに鳴といへるにてよもすから待たることはしられたり、三四五の句はかりの戸をあくる時に²なくほとゝきすかなのこゝろ也

夏歌とて

撰政太政大臣

一一二
うちしめりあやめそかをる時鳥なくや五月のあめの夕くれ (二二〇)

三四五一二とつゝけてみるへし、四の句はなく五

1 かけ合せてよめり―かけ合せたり(野・乙)

2 四の句の下にゝみるへし―野本欄外に注記する。

3 を聞てゝつゝまり也―にて時鳥の深き嶺より出しことおしはかりてしれるよし也(野)

4 しれる也―おしはかりてしれる也(乙)

5 おしはかりたる意にて―例のおしはかりたるけりにて(乙)

〔学〕とくおき出て笹の丸やのかりの戸をあくる折しも時鳥のなきたるかいひしらすあはれなるよし也、此うた家つとにさせるふしもなしとあるは上句を序とのみおもはれしなるへし

1 三四五の句―三四の句(野) 2 なくほとゝきすかな―なく(野)

〔学・ナシ〕

〔野〕三四五一二とつゝ意也、なくやのやはなかくのやにて意はなし、さ月の雨の夕くれに時鳥のなくさへあはれなるを猶うちしめりあやめのかをると也

月のといふことにて、やに心はなし、時鳥の鳴さ
月の雨の夕くれにうちしめり軒のあやめのかをり
ていとゝあはれをそへたりと也¹

述懐百首歌に

俊成卿

一一三
けふはまたあやめのねさへかけそへてみたれそまさ
る袖のしら玉(二二一)

けふは五月五日をいふ儀をねといへは、あやめの
ねさへ」²⁹かけそへてといへり、袖のしら玉は述
懐のなみた也

釈阿に九十賀たまはせける時、屏風に五月雨

撰政太政大臣

一一四
を山田にひくしめ縄のうちはへてくちやしぬらん五
月雨の比(二二六)

うちはへてはうち延てにて、さみたれの長くふる³
ことをそへたり、此句の下にふりぬれはといふ詞⁴
のそはる歌也⁵

百首歌よませ侍りけるに 前関白太政大臣

1と也—といふこゝろ也(乙)

〔学・ナシ〕

1 述懐百首歌に—述懐百首歌よみ侍ける時(野)

〔野〕けふは五日五日をいふ、袖のしら玉は述懐の涙
也、涙をねといへはあやめのねさへかけそへてとはい
へる也

〔学・ナシ〕

1 九十賀—九十の賀(野・乙)

2 撰政太政大臣—撰政

(野・乙)

3 長くふることをそへたり—長くふる意をかねたり
(野)

4 此句の下にゝそはる歌也—野本は欄外に注記する。

5 そはる歌也—そへてみるへし(野・乙)

〔学・ナシ〕

一一五 さみたれはおうの河原のまこも草からてや波の下に

くちなん (二三一)

初句さみたれにはの意也、川水のまさりたれはか
らてまこも草の波の下にくちなんとなり

五月雨の心¹ 定家卿²

一一六 玉鉾のみちゆく人のことつてもたえてほとふるさみ
たれの空 (二三二)

本歌恋しなはこひもしねとや玉鉾の道ゆく人のこ
とつてもせぬ、三の句のもゝしに心をつくへし、
ことつてもたえ、道もたえてといふ意也、道のた
ゆるはさみたれに川水のまさりて橋などのたえた
るをいふ

百首歌奉りける時 忠良卿

一一七 あふち咲そとの木かけ露おちて五月雨はるゝ風わ
たる也 (二三四)

そともは背面²にて北をいふ、そとが浜なといふに
てしるへし、二の句そとの庭のと詞のそはる格

1 まさりたれはゝとなり―まさりてとは、菰草もかり
かたければからてや波の下にくちなんといへる也
(野) まさりてまこもくさをからねは波の下にくちな
んといへる也(乙)

〔学〕本歌恋しなはこひもしねとや玉鉾の道行人のこ
とつてもせぬ、この歌家つとに何のせんもなく五月雨
には似つかしからすとあるはいかゝ、道行人のことつ
てもたえてといへるにて、道のたえたるよしはしられ
たり、言伝ものもゝしに心をつけてみるへし、道のた
えたるは五月雨の日数ふるまゝに、何橋などのたえ
るをいふ、道のたえたるか五月雨の情なれば、似つか
はしからすなといふへき歌にはあらず

1 五月雨の心を―五月雨(学) 2 定家卿―定家朝臣
(学) 3 三の句の―ことつても(野) 4 道のたゆる
は―道の絶たるは(野)

〔学・ナシ〕

1 はるゝ―はれん(乙) 2 背面にて北をいふ―北おも
てにてそとは北をいふ(野)

3 二の句ゝしられたり―こゝはそとの庭の意也、あ
ふち咲といへるにてしか聞ゆ(野) こゝはそとの庭
をいふ、あふち咲といへるにてしか聞ゆ(乙)

也。あふち咲といへるにて庭なることはしられた
り

五十首歌奉りける時

定家卿

一一八 さみたれの月はつれなきみ山よりひとりもいつるほ

とゝきすかな (二三五)

¹ 下句は時鳥はかりいてゝ鳴ことかなの意也 ² 「 30

大神宮に奉りける夏歌の中に

太上天皇御製

一一九 ほとゝきす雲井のよそに過ぬやはれぬ思ひのさみた

れの空 (二三六)

はれぬ思ひとあるにて御述懐なることはしられた¹

り、四五一二三とつゝけてみるへし、上御句は時³

鳥さへ雲井のよそに鳴行て我心にはまかせずとい⁴⁵

ふ意也

雨後時鳥

二条院さぬき

一二〇 五月雨の雲間の月のはれゆくをしはし待けるほとゝ

きすかな (二三七)

〔学・ナシ〕

¹ 下句は「ひとり」ははかりの意にて下句(野・乙)

² の意也——といふ意也(野) といふことろ也(乙)

〔学・ナシ〕

¹ 御述懐なることはしられたり——御述懐と聞えたり

(野) ² しられたり——きこえたり(乙)

³ みるへし——意得へし(野)

⁴ 鳴行て——鳴過て(野)

⁵ 我心には——心には(乙)

〔学・ナシ〕

しはし待つとはしはしまちて鳴ける也、ちてなき¹
のつゝめちとなるにてしるへし

題しらす

俊成卿

誰かまたはな立花におもひいてん我もむかしの人と
なりなは(二三八)

本歌五月まつ花たちはなのかをかけはむかしの人の
袖のかそする、たち花の匂ひにむかしの人のし
のはるゝより我身の行末をおもひやりたる意也¹

通具卿

ゆく末をたれしのへとて夕かせにちきりかおかん宿
のたち花(二三九)

これも立花の匂ひにむかしの人のしのはるゝより¹
我身のゆく末をおもひやりたるこゝろ也²

百首歌奉りける時¹

式子内親王

かへりこぬむかしを今とおもひねの夢のまくらに匂
ふたち花(二五〇)

三四一二五とつゝけてみるへし、二の匂はむかし

1 しはし待つとはしはしまちて鳴けるは(野・乙)
2 しはしまちてゝゝにてはしはし待て(野)

〔学・ナシ〕

野本は本歌を注文末尾に記す。

1 行末をおもひやりたる意也―行末をおもふ意也
(野) 行末をおもひやりてよめる也(乙)

〔学・ナシ〕

1 しのはるゝ―おもはるゝ(野)

2 ゆく末をおもひやりたるこゝろ也―行末を又誰にし
のへと夕風に契りおかんとはいへる也(野)

3 やりたるこゝろ也―おもひやりてよめる也(乙)

〔学〕此うた二三とつゝくこゝろにはあらず、三四一
二五と句を次第して二ノ句の下になしてといふ詞をそ
へてみるへし、おもひねはむかしのことを恋しくおも
ひてねたる也、むかしをいまになすよしもかなの歌を
とらせ玉へり

1 奉りける時―奉し時(学)

〔野〕本歌五月まつ花桶のかをかけはむかしの人の袖
のかそする、いにしへのしつのをたまきくりかへしむ
かしを今になすよしもがな、此二首をとり玉へり、三

一二四

立花のはなちる軒のしのふ草むかしをかけて露そこ
ほるゝ(二四一)

忠良卿

を今となしてと詞のそはる格にて、三四の句はむ
かしの人を恋しく思ひてねたる夢の枕にといふ意
也、かへりこぬ昔」31を今となして匂ふ立花とい
へるにて、むかしの人を夢にみしことはしられた
り

露は涙にて、むかしをかけてはむかしを思ひいて
ゝ也

五十首歌奉りける時

慈円大僧正

一二五

五月やみみしかき夜はのうたゝねに花たちはなの袖
に涼しき(二四二)

上句にいねられすといふ意をふくめ、下句に匂ひ
をうつしてといふことをいひのこしてしか聞せた
る歌也、一四五二三とつゝけてみるへし、三の句
のにもしはなるにの意也、五月闇はな立花の袖に

四一二五とつゝけて意得へし、三四の句はむかしの人
をこひしくおもひてねたる夢の枕にといふ意也、ゆめ
の枕にかへりこぬむかしを今と匂ふ立花とはむかしの
人にあひみし夢をいふ〔欄外注記〕むかしを今とな
してと詞をそへてみるへし

〔乙〕前半は野本注と「とり玉へりーとれり」「意得
へしーみるへし」「いふ意也ーいふ意にて」以外は同
文。後半「ゆめの枕に」以下は、乙本は「二の句はむ
かしを今となしてと詞のそはる格也、是は本歌よりひ
ゝきてそなはる詞としるへし、かへりこぬむかしを今
となして匂ふ立花といへるにて、むかしの人を夢にみ
たることはしられたり」とある。

〔学・ナシ〕

〔野〕むかしをかけてはむかしのしのはれてといふ意
也、露はなみたをいふ

〔乙〕むかしをかけてはむかしを今にかけてといふこ
ゝろなり、露そこほるゝは涙のこほる也

〔学〕本歌五月まつ花たちはなのかをかけはむかしの
人の袖の香そする、結句に匂ひをうつしてといふ詞の
そはる歌にて、三ノ句はうたゝねなるにの意也、むか
しの人の恋しくおもはせていねかてなるよしを余情に
聞せたり、此集の冬部に、冬くれば山もあらはに木葉
ふり残る松さへみねにきひしき、是も結句に意をふく
めたる同じ格の歌也

〔野〕三の句のにもしはなるにの意也、此句の下にい
ねられすといふ詞をそへ又五の句の下に匂ひをうつし

涼しき匂ひうつしてみしかきよはのうたゝねなる
にいねられすといふ意也

俊成卿

一二六 たち花の匂ふあたりのうたゝねは夢もむかしの袖のかそする (二四六)

下句夢にもむかしの人の袖のかそするといふ意也

家隆卿

一二七 ことしより花咲そむるたち花のいかてむかしのかに匂ふらん (二四六)

われも下句はいかてむかしの人の袖のかに匂ふらんとことはをそへてみるへし

五十首歌に

定家卿

一二八 夕ぐれはいつれの雲のなこりとはな立花に風のふくらん (二四七)

二三の句はいつれの。の雲に吹し風のなこりとしていふ意也、さるは下よりひゝきて聞ゆ、ゆふくればいつれの所の雲に吹て、人を恋しくおもはせ

てといふ詞をそへてみるへし、そのころをいひのこして聞せたる格也、四五一二三とつゝけて意得へし、花たちはなの袖にすゝしき匂ひをうつして月もなき五月闇のみかしき夜はのうたゝねなるにいねられすといふころ也

(乙) 三の句のもしはなるにの意なり、此句の下にいねられすといふ詞のそはる格にて、上句は月もなき五月闇のみしかきよはのうたゝねなるにいねられすといふ意也、下句ははなたち花の袖に涼しき匂をうつしてと詞をそへてみるへし、これはそのころをふくめてしきとちめたる格也

(学・ナシ)

1 俊成卿—俊成卿女(野・乙) 2 下句—下句は(乙)

3 いふ意や—詞をそへてみるへし、本歌よりひゝきてそはることは也(野) いふころ也(乙)

(学・ナシ)

1 われも下句はいかて—下句いかて(野)

(学) 三ノ句のなこりは此歌にてはかたみといふ意に聞ゆ、此集の無常にて、はるかすみかすみし空のなこりさへけふをかきりの別なりけりとある歌のなこりも同じ意にて、夕ぐれかかたみとなりし也、一首の意は夕ぐれはたか雲となりしかかたみとてむかしか恋しくおもはれぬらんといへる也、はな立花の風の吹らんといひてむかしの人の恋しくおもはるゝよきに聞ゆるは、本歌をとれる歌なればなり、本歌は前のうたの下にいへり、雲はあたし野のけふり也

一二九

鵜かひ舟あはれとそみる物のふの八十うち川の夕や
みの空(二五一)

鵜川を

慈円大僧正

たる風のなこり」³²とて、又はな立花に吹てむか
しの人をしのはするならんといふ意にて、ゆふへ
の雲をなかめて人を忍ふは、恋のならひ也、夕く¹²
れは雲のはたてにものそおもふ天つ空なる人をこ
ふとて、又さても猶とはれぬ秋のゆふは山雲ふく^{13 14}
風は嶺にみゆらん、¹⁵是らの歌にてしるへし

ものゝふの八十うちは多くの人をいふ、²あまたの
人の此世から闇にまよひて鵜かひ舟をさすはあは
れなること也といふ意にて、鵜かひはあまたの舟⁶
をこきつれて、多くの人のするわさなれはかくい
へる也、⁸もののふの八十うち川のあしろ木にいさ
よふ波のゆくへ」しらすも、此歌によりてよまれ
たるなるへし、是はうち川のあしろ木にいさよふ
波の如くあまたの人もこの世にしはしあれと、つ

- 1 五十首歌に―守覚法親王家五十首歌に(学)
2 定家卿―定家朝臣(学) 3 風の―その(野)
4 といふ意也―のころ也(野) 4 さるは下よりひ
ゝきて聞ゆ―にふきしかせのつゝめとなるにてしる
へし(野・乙) 5 所の―ナシ(野) 6 恋しくおもはせ
たる風の―しのはせたる風の(乙) 恋しくおもはせ
る(野) 7 吹て―風の吹て(野) 8 しのはするならん
―恋しくおもはすらん(乙) 9 意にて―意也(野・乙)
10 忍ふは―おもふころは(野) 11 恋のならひ也―恋
の歌に多くあり(野) 12 夕くれば―こふとて―ナシ
(野・乙) 13 又―ナシ(野・乙) 14 さても―みゆらん
―ナシ(野) 15 是らの歌にてしるへし―恋の部にいふ
をみてしるへし(野) 此歌にてしるへし(乙)
- 〔学〕ものゝふの八十うち人の多かる中に鵜飼かとも
となりて、此夕やみの空にうふねをさすはいとあはれ
なるわさそとなり
- 1 鵜川を―鵜河(学)
2 多くの―あまたの(乙) 3 あまたの―多くの(野)
4 鵜かひ舟をさすは―鵜をつかふは(野)
5 也といふ意にて―そといふ意也(野・乙)
6 あまたの―あまた(野) 7 わさなれはかくいへる也
―わさ也(野) わさなれはかくはいへり(乙)
8 もののふのゝいふ意也―ナシ(野・乙)

ひに行へもしらすといふ意也

寂蓮

一三〇

うかひ舟高瀬さしこすほとなれやむすほゝれ行篝火
のかけ(二五二)

¹二三の句は高瀬さしこすあひたなれやのこゝろに
て、むすほゝれ行は篝火のかけのみたれ行をいふ²³⁴

千五百番歌合に

俊成卿

一三一

大井川かゝりさし行うかひ舟いく瀬に夏の夜をあか
すらん(二五三)

下句いく瀬に夏の夜をあかすらん、夏は夜のみじ
かけれはいくせもすきずして夜のおくるらんとい
ふ意也

定家卿¹ 33

一三二

久かたの中なる川の鵜かひ舟いかにちきりてやみを
まつらん(二五四)

本歌久かたの中におひたるさとなれは光をのみそ
たのむへらなる、久かたの月の中なるかつらのか²

〔学・ナシ〕

¹ 二三のゝにて―ナシ(野・乙)

² むすほゝれ行は―むすほゝるゝは(野・乙)

³ みたれ行―みたるゝ(野・乙)

⁴ いふ―この文の次に「高瀬さしこすほとなれやは高
瀬さしこすあひたなれやのこゝろ也」(乙)

〔学〕下句はいくせに夏の夜を明すらむ、明やすき頃
なれはいくらの瀬をも過すして、夜の明ぬらんと意の
うらへかへるてにをは也、家つとの註はあやまれり

〔野〕下句はいく瀬に夏のよを明すらんいく瀬もわたり
で夏のよはあけぬらんといふ意也

〔乙〕下句いくといへるにて心のうらへかへることを
しるへし、いく瀬に夏の夜をあかすらん、夏の夜はみ
しかけれはいくせもすきずして夜をあかすらんといふ
意也

¹ 定家卿―定家朝臣(学)

² 久かたの―上句は久かたの(野)

³ 舟は―舟と詞をそへてみるへし(野)

はのうかひ舟は、光りをのみたのむへきに、いかなる契にて闇をまつらんといふ意也

撰政太政大臣¹

一三三
いさり火のむかしの光りほのみえてあし家の里にとふほたるかな (二五五)

本歌はるゝ夜のほしか河への螢かも我すむさとの海人のたく火か、夏の夜螢をみてあし家の里のむかしを思ひいてたる意也、伊勢物語に合せみるへし

式子内親王

一三四
窓ちかき竹の葉すさふ風のおとにいとゝみしかきうたゝねの夢 (二五六)

すさふは風の吹すゝむをいふ、二三の句は竹のは吹すさふ風のおとにさめてと詞をそへてみるへし

公経卿

一三五
窓ちかきいさゝむら竹風ふけは秋におとろく夏のよの夢 (二五七)

4 光りを―下句はひかりを(野)

5 いふ意也―詞をそへてみるへし(乙)

〔学・ナシ〕

1 撰政太政大臣―撰政(野・乙)

2 夏の夜ゝ意也―ナシ(野)

3 むかしを―むかしのことを(乙)

4 意也―也(乙)

5 伊勢物語に合せみるへし―伊勢物語 (虫損 此斎院に合せみるへし(野) 此こと伊勢物語にあり、合せみるへし(乙)

〔学・ナシ〕

1 二三の句は竹のゝさめてと―三の句の下にさめてといふ(野) 二三の句竹の葉ふきすさふ風のおとにさめてと(乙)

〔学〕三ノ句の下にその風のおとのといふ詞をそへてみるへし、四ノ句の秋は涼しき意にて、誠の秋になりたるにはあらず、家つとの註のことくにては秋の部に入へき歌也、此集の恋部に、ことの葉のうつりし秋も過ぬれば云々、いまこんとたのめしことをわすれすは云々、是らの歌もみな三ノ句のはもしに意をふくめた

四の句は秋の¹声におとろく也、のこゑに¹のつゝめ
| となるにてしるへし

五十首歌奉りける時

慈円大僧正

一三六

むすふ手にかけみたれ行山の井のあかても月のかた
ふきにけり(二五八)

本歌むすふ手の雪ににこる山の井のあかても人に
わかれぬるかな、山の井の水を結ふはあつき時の²
しわざにて、あかて月のかたふくはみしか夜のさ³
まなれは、夏⁴といはても夏の夜の月の歌と聞えた
り

34

通光卿

一三七

清見かた月はつれなき天の戸をまたてもしらむ波の
上かな(二五九)

きよみかたに月の清きことを聞せて、二の句は夜
の明るにもつれで月は空にのこるをいふ、三の句
のをはなる物をの意にて、またてもは月の入をま
たても也、この歌も夏⁵といはすして夏の月と聞せ
⁶

る同じ格也、此歌の意も末にとけるをみてしるへし
¹ 声―おと(乙) ² 乙本注末に「秋と夏をかけ合せた
り」とある。

〔学・ナシ〕

¹ 山の井の水を結ふは―水をむすふは(野)

² あつき時のしわざにて―あつき夜のさま也(野)

³ さまなれは―さま也(野)

⁴ 夏といはても―聞えたり―ナシ(野) 夏夜の月と聞
えたり(乙)

〔学〕三ノ句のをもしはなるものをををなり、三ノ句
の下にその月のいるをといふ詞をそへてみるへし、明
やすき夏のよのけしきなり

〔野〕三の句は天の戸なるものをの意也、清みかたに
月のきよきことをおもはせたり、二の句は波の上のし
らむにもつれずして月の空に残るをいふ、またでもは
月の入をまたても也

¹ 聞せて―聞せたり(乙) ² つれで―つれすして(乙)

³ をは―をもしは(乙) ⁴ この歌も―これも(乙)

⁵ いはすして―いはて(乙) ⁶ 夏の―夏夜の(乙)

たり

水辺涼自秋といふことを¹

有家卿

一三八

涼しきは秋やかへりてはつ瀬川ふる河のへの杉のし

たかけ (二六一)

初句すゝしさにはの意にて、²にもしをはふけるこ

とは也、二三の句ははつせへ恥といひかけて、は

づははづらんのつゝめ也、⁶これはふる川のへの二

もとの杉とて名高き杉也

「

家の百首歌に¹

撰政太政大臣²

一三九

かさねてもすゝしかりけり夏衣うすきたもとにやと

る月かけ (二六〇)

五の句はよひ出しの句にて、その月かけはといふ⁴

詞のそはる格也、三四五二とつゝけてみるへし

題しらす

西行法師¹

一四〇

道のへの清水なかるゝ柳かけしはしとてこそ立とま

れつれ (二六二)

初句道のへにとある本はわろし、二一三四五とつ²

〔学・ナシ〕

1 水辺涼自秋といふことを―ナシ(野) 水自_レ秋涼といふ心を(乙)

2 意にて―意也(野・乙)

3 にもしをはふけることは也―ナシ(野・乙)

4 二三の句は―ナシ(野) 二三の句(乙)

5 いひかけて―いひかけたり(野・乙)

6 つゝめ也―意也、[らんのつゝめ]となるにてしるへし(野)

7 これはゝ高き杉也―ナシ(野・乙)

〔学・ナシ〕

1 家の百首歌に―家百首歌合に(野・乙)

2 撰政太政大臣―撰政(野)

3 五の句は―結句の月かけは(野)

4 いふ―ナシ(野)

〔学・ナシ〕

1 西行法師―西行(野・乙)

1 二一三四五―二二三(野)

2 つゝけてみるへし―つゝく意也(野)

一四一
よられてみるへし、四の句のこそは意のうらへかへ
ることにて、しはしとてこそ立とまりつれ、あま³
り涼しさにおもはす時をうつしたりといふ意也

よられつる野もせの草のかけろひて涼しく曇る夕立
の空 (二六三)

よられつるは照日¹のかけに草葉のよられたるな
り、³⁵野もせの草は野もせはきましてしけりたる
草にて、此句の下に日かけもといふ詞のそはる格²
也⁴

千五百番歌合に

公経卿

一四二
露すかる庭の玉笹うちなひきひと村すきぬ夕たちの
雲 (二六五)

玉笹の玉を露にかけてみるへし、三の句うちなひ
きと切たるを、下に又うちなひきてといふ詞のそ¹
はる格也²

百首歌の中に

式子内親王

一四三
ゆふ立の雲もとまらぬ夏の日のかたふく山に日くら

3 あまりーナシ(野)

〔学・ナシ〕

1 照日¹のかけに草葉のー草の葉のてる日に(野)

2 草にてー草也(野・乙)

3 此句ー二の句(野・乙)

4 詞のそはる格也ー詞をそへてみるへし(野・乙)

〔学・ナシ〕

1 下に又ーナシ(野・乙) 2 いふ詞のそはる格也ー又
詞のそはりて下へつゝく格となれり(野) いふ詞のそ
はりてしたへつゝく格となる也(乙)

〔学〕四ノ句の下になくといふ詞をそへてみるへし、
秋のいろをはらひはてゝや久かたの月のかつらにこか
らしの風、これも同じ格にて、四ノ句の下にふくとい
ふ詞のそはる歌也、猶このたくひ此集の歌にあまたあ

しのことゑ (二六八)

四の句の下に鳴といふ詞のそはる格也、秋のいろをはらひはてゝや久かたの月のかつらにこからしの風、このうたも四の句の下にふくといふ詞のそはる歌にて同じ格也

夏月

頼政卿¹

一四四

庭のおもはまだかわかぬに夕立の空さりけなくする月かな (二六七)

さりけなくはしかありけなくのつゝめにて、ゆふたちのふりしやうにもなくたちまちにはれたるをいふ

千五百番歌合に

忠良卿¹

一四五

ゆふつく日さすや庵の柴の戸に淋しくもあるか日くらしの声 (二六九)

さすやのやもしはなかめのやにて意はなし、三の句のもしはなるにの意にて、四の句のかもしれない意也

り、家つとの難はあたらす

¹ 詞のそはる格也―詞をそへてみるへし(野) 詞のそはる格にて此頃のうたに此格多し(乙)

² このうたも―このうたの風是も(乙)

³ そはる歌にて同じ格也―そはる格也(乙)

野本注末に「此格古歌にあまた□□(虫損)」とある。

〔学・ナシ〕

¹ 頼政卿―頼政(野・乙)

² のつゝめにて―の意也(野) にて(乙)

³ ゆふたちのゝいふ―ナシ(野)

⁴ たちまちに―ナシ(乙)

〔学・ナシ〕

¹ 忠良卿―忠良(野・乙)

² 意はなし―心はなし(野)

³ 意にて―意(野)

野本は注末尾に「四の句の上に猶という詞をそへてみるへし」とある。

百首歌奉りける時 撰政太政大臣¹

一四六 秋ちかきけしきの杜に鳴せみのなみたの露や下葉そ
むらん (二七〇)

² けしきの杜は名所にて、三四五の句はまた秋の露
⁴ もおかねは鳴せみの涙の露が下葉をそめつらんと
⁶ 也

五十首奉りける時

— 36

一四七 螢とふ野沢にしけるあしのねのよな／＼下にかよふ
秋かせ (二七三)

¹ 夜な／＼へ芦のよといひかけて、したにかよふは
あしのねの縁也、上句は夏のけしきにて、下句は
² 秋風の忍ひて吹さま也³

二条院さぬき¹

一四八 鳴せみのこゑもすゝしき夕ぐれに秋をかけたる杜の
した露 (二七一)

三の句のにもしはなるにの意にて、秋をかけたる
³ は秋を夏へかけたる也、⁴ 鳴せみの声もすゝしき夕

〔学・ナシ〕

¹ 撰政太政大臣―撰政(乙)

² けしきの杜は名所にて―秋ちかきけしきとけしきの
杜へいひかけ玉へり(野) けしきの杜は名所也(乙)

³ また―ナシ(野)

⁴ おかねは―おかぬ時なれば此下葉は(野)

⁵ 露が下葉をそめつらん―露のそめたるならん(野)
⁶ 也―いふ意也(野・乙)

〔学・ナシ〕

野本次歌と歌順逆。従って「撰政」と作者名を記す。

〔野〕上の句はよといひ下にかよふといはん序にて夏
のけしき也、したにかよふは忍ひにかよふ意にて、芦
の根は下によとてかよふもの也

¹ 夜な／＼かよふは―よな／＼も下にかよふもみな
(乙)

² 秋風の―はや秋風の(乙) ³ さま也―よし也(乙)

〔学〕秋をかけたるは秋を夏へかけたるなり、此こと
くはしくは恋部にいふをみてしるへし、三ノ句はゆふ
くれなるにの意なり

¹ 二条院さぬき―百首歌奉り時 二条院讃岐(学)

² にて―ナシ(野) ³ 秋を夏へ―夏へ秋を(野)

⁴ 鳴せみのゝ意也―杜の露の涼しくおつるをいふ(野)
ナシ(乙)

くれなるに、はや秋のけしきに杜の露かおつると
いふ意也

夕顔をよめる

前太政大臣

一四九

しら露のなさけおきける言の葉やほのくみえし夕
かほの花(二七六)

これは源氏の君に夕かほの上より歌かけるあふき
に夕かほの花をひとふさ置て奉しこと也、なさは
は風流」といふ意にて、言の葉は歌也、夕白の花
の光りに扇の歌のほのくみえたる也、下句はほ
のくみえしそのゆふかほの花なりと詞をそへて
みるへし、夕白の花をみて源氏のむかしをおもひ
出たる意也⁸

百首歌よみ侍りける中に

式子内親王

一五〇

たそかれの軒はの荻にともすればほにいてぬ秋の下
にことゝふ(二七七)

これも源氏の君の人たかひにて、軒はの荻のかた
へ忍び行玉ひしことにて、たそかれといへるに人

〔学・ナシ〕

1 歌かける―歌をかける(野)

2 ひとふさ―ひと枝(野)

3 也―也、夕白の巻をみてしるへし(野)

4 なさははくそへてみるへし―しら露のふかきなさけ
おきける空のけふやほのくみえしその夕かほの花な
らんと詞をそへてみるへし(野)

5 意にて―ことにて(乙)

6 夕白の花のくみえたる也―ナシ(乙)

7 源氏の―源氏の君の(野)

8 意也―ことゝる也(野・乙)

〔学・ナシ〕

1 源氏の君の―源氏の(野) 2 にて―して(野・乙)

3 忍び行玉ひし―しのひかよひ玉ひし(野) 4 ことに
て―こと也(野・乙) 空蟬の巻をみてしるへし(野)

5 みるへし―意得へし(野) 6 は荻の緑也―秋は源氏
の君をいふ(野) 7 ことゝふは―ことゝふは秋風のお
とをたつるにて(野) 8 にて―也(野)

たかへの心あり、四の句ほにいてぬ秋風そと詞を
 そへてみるへし、ほにいてぬは萩の縁也、下にこ⁷
 とふは忍ひにものいふといふことにて、ほにい⁸
 てぬ秋風を源氏の君によそへたり、ともすれは¹⁰
 やゝともすれはにて、その後も又消息なとかよは¹¹
 し¹² 37 てもものいひ玉ひしことのあれば也¹⁴

夏歌とて

慈円大僧正

一五二

雲まよふゆふへに秋をこめながら風もほにいてぬ萩
 のうへかな (二七八)

ゆふへにはゆふへの空に也、のそらにのつゝめに
 となるにてしるへし、雲まよふは雲のかなたこな¹
 たへ行かふことにて、空にははや秋風のたちたる²
 さま也、萩の縁に風もほにいてぬとはいへり、風³
 もほにいてぬは風もあらはには吹ぬをいふ

夏の御歌の中に

太上天皇¹

一五二

山さとの嶺のあま雲とたえしてゆふへすゝしき楨の
 下露 (二七九)

9 ほにいてぬゝよそへたりナシ(野) ほにいてぬ秋
 風を源氏の君によそへたり(乙)

10 ともすれはゝにてゝともすれはゝやゝともすれは也
 (野・人たかへの心ありの次にくる)

11 にてゝの意にて(乙) 12 その後も又ゝその後も(野)
 又その後も(乙) 13 かよはしてもものいひ玉ひしゝかよ
 はし玉へは(野) かよはし玉ひし(乙)

14 ことのあれば也ゝともすれはとそいへり(野) こと
 のあるにあたれり(乙)

〔学・ナシ〕

1 雲まよふはゝにてゝ雲まよふは雲のかなたこなたに
 行かふをいふ(野・注文の最初にある)

2 行かふゝ行(乙) 3 萩のゝをいふゝ風もほに出ぬは
 風もまたあらはれては萩の葉にふかぬをいふ、ほに出
 ぬは萩の縁也(野) 風もほにいてぬはかせもまだあら
 はにふかぬにて、ほにいてぬは萩の縁なり(乙)

〔学・ナシ〕

1 太上天皇ゝ太上天皇御製(野)

2 はるゝをいふゝはれたる也(野)
 はれたるをいふ(乙)

みねのあま雲は夕立の雲にて、とたえははるゝを
いふ

文治六年女御入内の屏風に

前関白太政大臣

一五三 岩井くむあたりの小笹玉こえてかつ／＼結ふ秋のゆ

ふ露（二八〇）

「

¹玉は水玉にて、こえては笹のはをこえて也、かつ
／＼はかつといふも同じことにて、そのまゝとい
³ふ意也、くむ清水の笹の葉にこほれたる水玉がそ
のまゝ秋の露に成と也⁵

千五百番歌合に

宮内卿

一五四 かた枝さすをふの浦なしはつ秋になりもならずも風

そ身にしむ（二八一）

本歌をふの浦にかた枝さしおほひなるなしのなり
もならずもねてかたらはん、かた枝さすはかた枝
さしおほふなり、しおほふのつゝめすとなるにて
しるへし、かたえさしおほふをふの浦なしのかけ

〔学・ナシ〕

¹ 玉はこえて也―玉こえては水玉のこゆる也（野）
玉こえては玉水のこえて也（乙）

² 同じことにて―おなし、かつは（野）

³ 意也―こと也（野・乙）

⁴ 水玉が―か（野・乙）

⁵ 成と也―なるをいふ（野）なりし也（乙）

〔学・ナシ〕

¹ まだ―ナシ（野・乙）

² はや―ナシ（野）

³ 涼しと―はや涼しと（野）

は、まだは¹つ秋になるかならぬにはや風の身にし
みて涼し³といふ意也

百首歌奉りける時

慈円大僧正

一五五 夏ころもかたへ涼しくなりぬ也夜やふけぬらん行あ

ひの空 (二八二)

└ 38

本歌夏と秋とゆきかふ空のかよひ路はかたへ涼し
き風やふくらん、夏衣かたへは夏衣のかた袖¹とい
ふ意也、五の句の上に夏と秋とのといふ詞をそへ
てみるへし、³これは本歌よりひゝきてそはる詞也

をられぬ水一の巻終

└

〔学〕下句は夜や更ぬらん秋と夏とのゆき合の空の意

なり、かく詞をそへてみるへし、二三ノ句はかた／＼
の袖か涼しくなりたりといふ意なり、本歌夏と秋と行
かふ空のかよひ路はかたへ涼しき風やふくらん

1 かた袖―かた／＼の袖(野)

2 意也―こと也(乙)

3 これはノ詞也―下句は夏と秋との行あひの空になり
て夜もふけぬらんといふ意也(野)